

上野彦馬とその時代

姫野順一

上野彦馬は「維新の志士」を撮影したことで知られている。日米修好通商条約によって安政6（1859）年に2度目の開港を迎えた長崎では、外国人居留地が造成されて貿易が活発になり、彦馬のスタジオにも多くの人士が入り出した。

彦馬は「くくなる」2年前の明治35（1902）年、日刊「東洋日の出新聞」の記者西郷四郎のインタビューに、「当時、浪人、志士、書生などがごごとく長崎に集まっていた」と回顧している。ここで写真に撮られた人物として名が出てくるのは芳川顕正、高杉晋作、坂本龍馬、西郷隆盛、伊藤俊輔、大隈八五郎といった土佐、長州、薩摩、肥前の志士たち。しかし、西郷隆盛は彦馬の記憶違いのようである。写真嫌いで知られた西郷の写真はこれまで1枚も発見されていない。

▼時期

最も有名なのは坂本龍馬の写真である。長崎で撮られた



①坂本龍馬湿板写真（高知県立歴史民俗資料館蔵）

⑦ 維新の志士

写真は立像（写真①）と座像（写真③）、亀山社中の同志と納まる集合写真（写真④）が知られている。立像ガラス原板（写真②）は、数奇な運命を経て高知県立歴史民俗資料館が所蔵している。上野彦馬撮影局で使われたガラス原板は珍しい。

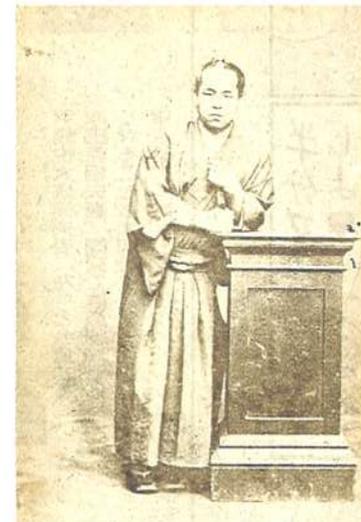
最近の研究により、これらの土佐藩関係者の写真の撮影者は、彦馬ではなく彦馬の下で蘭化学と写真を修業していた土佐藩の井上俊三であると判明している。土佐商会の池道之助の日記によれば、井上は慶応2（1866）年9月に土佐藩から拝領された300面で彦馬の道具一切を買い上げ、これ以降土佐に写真機材を持参して帰国する翌年の6月まで土佐人を無料で撮影した。

立像写真は、このガラス原板を紙に密着焼きしてトリミングした名刺の写真である。これらの3種の写真は、髪型、服装、スタジオの背景から同時期の撮影と推測される。詳しい時期については「慶

龍馬や晋作ら 雄姿鮮明に



④坂本龍馬（左から3人目）と亀山社中の同志たち（坂本中岡銅像建設会編「偉傑坂本龍馬」大正15年より）



⑤後藤象二郎（日本カメラ博物館蔵）



⑥高杉晋作（港区立郷土歴史館蔵）



②坂本龍馬湿板写真の種板（高知県立歴史民俗資料館蔵）



③坂本龍馬座像（長崎歴史文化博物館蔵）

応2年末」と「慶応3（1867）年初」で研究者の間でも見解が分かれているが、筆者は慶応3年1月と考えている。

当時の写真の値段はいかほどだったのだろうか。

▼値段

理由としては▽写真④に、慶応2年11月には長崎に滞在せず、年末に長崎に帰った溝淵広之丞（左から2人目）が写っている▽写真①で龍馬がもたれかかる黒台が、慶応2年4月に撮影された高杉晋作の写真に写る白台ではなく、慶応3年1月の清風亭会談の時期に撮影された後藤象二郎の写真（写真⑤）と同じもの▽溝淵の従者吉村正が、龍馬はこの時「天神下に居リシ頃」と述べた井上の言葉を証言しているが、龍馬は慶応2年の末は本博多町の高台小曾根剛四郎邸に下宿していたことが挙げられる。

彦馬の収入について、長井は日記でこう記している。「実に大なるものにて、この家は写真にて立居申し候」。最先端技術を生かして撮影局は繁盛し、彦馬は大金持ちになった。

ちなみに写真①の左側に白の台形が写りこんでいるが、これは天井または窓から差し込む光線跡である。素人じみた撮影ミスであるが、これは彦馬のスタジオに開口部があるり外から光を取り入れていることの証明となっている。写真①と③の白壁、④の白いついたては光線を調整する反射板である。写真師にとって光の調整は重要な写真技術であった。

写真⑥は、慶応2年4月ごろ、彦馬が撮影した高杉晋作である。長めの刀は「尺六寸（約80センチ）の愛刀「安芸国佐伯庄住藤原貞安」と思われる。「乗った人より馬が丸顔」と評されたように面長、小柄できゃしゃといわれた風貌をよく伝えている。髪を切ったのはイギリス留学の準備だったようである。

晋作は既に尊王攘夷を掲げ、身分制度を超えた「奇兵隊」を組織して活躍していた。だが、この時は愛人と滞在していた下関に、萩から妻子がやって来たため、長崎に逃げてきていた。晋作は律儀にこの写真を妻と愛人に送っている。

（長崎外国語大学長）
「偶数月の第3日曜日サンデーぶんかに掲載」